

いい仕事をする条件～「稲盛和夫一日一言」より

いい仕事をするために必要不可欠なこと

- ① 細部まで注意を払うこと
- ② 理屈より経験を大切にすること
- ③ 地道な作業を続けていくことを厭わないこと

稲盛 和夫

今月は、何度かご紹介してきた「稲盛和夫一日一言」(到知出版社)より、いい仕事をする条件について、取り上げさせていただきました。ここで、稲盛さんは、いい仕事をする条件として上記の三点をあげていますので、順番に見ていくことにします。

まず、「細部まで注意を払うこと」についてですが、どのような仕事であれ、細部まで手を抜かず、誠実に行うことは仕事の基本であると思われます。稲盛さんは、この本の中で、「神は細部に宿りたまう」という言葉を取り上げていますが、これは、ドイツの建築家ルートヴィヒ・ミース・ファン・デル・ローエ(Ludwig Mies van der Rohe、1886年-1969年)の言葉とされています。仕事の成果や結果等は、その細部に現われるとも言えるでしょう。このことは、モノづくりだけでなく、当財団のようなサービス業についても、当てはまるものと思われます。例えば、飲食店などを利用するときに、心地よく感じたり、気分よく過ごせたりするのは、料理の質はもとより、接客を含めたサービス全般に、細かい心遣いがなされているからではないかと考えられます。

次に、「理屈より経験を大切にすること」についてですが、実践や現場を重視された正に稲盛さんらしいお言葉だと思います。物事は、理論や理屈通りにいかないことは往々にしてあるわけで、いわゆる「頭でっかち」になるなということでしょう。ただし、注意しなければいけないのは、先ずは、理論や理屈をきっちりと押さえておく必要があるということです。理論や理屈を度外視して、現場の意見や方法だけで仕事をしていると、そのやり方は、いつかきっと破綻してしまいます。特に、次のテーマとも関連しますが、同じ仕事を継続して行っていると、一定のやり方に慣れ親しんでしまい、理論や理屈、言葉を変えて言えば、「あるべき姿」などが蔑ろにされがちな面が多々あります。本来のあるべき姿をきちんと押さえた上で、実践での経験を大事にすることが、仕事をする上で大切な視点であると思われます。

最後に、「地道な作業を続けていくことを厭わないこと」についてです。自分もそうですが、人間は、とかく飽きっぽいところがあります。地道な作業を続けていくと、集中力がなくなってしまうようなことがあるのも頷けます。ただし、仕事においては、そういった地道な作業から、新しいやり方だとか画期的な方法だとかが生まれるものなのです。言葉を変えて言えば、ゼロから何か生まれることはなく、何か土台があってはじめて新しいものや画期的なことが生まれる可能性があるのです。ヒット商品だとか画期的な製品、あるいは新しいビジネスモデルなどは、「そうか、その手があったか」と世間から思われるものが多いと言われています。これは、当然のことながら、従来の製品やビジネスモデルなどを、実践等により、よく把握していなければ、そのような新しい発想も出てこないわけで、世間の人からは見えないところで、「地道な作業」を続けた結果なのではないかと思われます。まさに「継続は力なり」のように、続けていくことの重要性をあらためて認識させるお言葉ではないかと思えます。

令和7(2025)年9月



一般財団法人 かながわ水・エネルギーサービス
理事長 松井 聡 明